『ヒロポンと特攻』　　2024 年 01 月 22 日

週刊誌で『ヒロポンと特攻』という本が出版されているのを知り、やっぱりそうかと思った。ドイツ・ナチズムの兵士たちは覚醒剤を用い、ヒトラーは中毒になっていたことは知られている。Ｔ・Ｋ生の『韓国からの通信』で、韓国の光州事件が起こった時、兵士たちは覚醒剤を注射されて、民主化を求める学生、若者たちを襲撃したと報告されていた。普通の精神状態ではない覚醒と興奮状態を作り出して、容赦なく襲わせたわけである。

『ヒロポンと特攻』を上梓した相可文代氏は、戦時中、菊の紋章の付いたヒロポン入りのチョコレートの包装を手伝わされたという証言を聞き、ヒロポンと特攻に関する証言や資料を集め、その実相を本書にまとめられた。ヒロポンは 1941 年に、売り出した覚醒剤で、「作業の能率増進」「頭脳の明晰化」「疲労の除去」などの効用がある。ヒロポン入りのチョコレートは航空兵のための高機能栄養食として開発されたものであった。中毒症状のリスクは説かれず、戦後も市中に出回っていた。私も子どもの頃から、ヒロポンを使っていたという話を幾度か聞いたことがある。身体へのリスクは当然あり、太宰治や織田作之助はヒロポン中毒になり、漫才のミス・ワカサはヒロポンがもとで亡くなったという。

「特攻」は日本の敗色が濃くなった頃、最初の「神風特攻隊」がフィリピン沖で米空母を撃沈させた予想外の戦果が伝わり、以後、これに倣えと、組織的に行われるようになった。戦闘機や人間魚雷「回天」などに爆薬を積み込み、敵艦に突っ込む、生きては帰れない悲劇的な戦法である。1944 年 10 月から敗戦の 1945 年の 8 月まで、海軍と陸軍を合わせ 3948 人の兵士、水上・水中特攻を含めると約 6400 人の若者が特攻で戦死している。日本独自の戦法であったが、世界の戦争史において、衝撃的な戦法として受け止められている。

特攻兵は、自ら志願して死に赴いたと言われているが、相可氏は、志願せざるをえないように追い込まれていたのであり、明日、出撃という夜は眠れず、家族を思い、悶々と過ごしたのが実態であったと報告している。鹿児島の知覧基地から出撃したことが知られているが、睡眠不足の中、重い爆薬を積んだ沖縄までの 3 時間、高度 3000ｍの飛行は、体に負担がかかる。その特攻兵にヒロポンが注射された訳である。覚醒し、意気軒昂に飛び立ったという。しかし、この事実は伏され、表には出てこなかった。水戸黄門役を演じた俳優の西村晃氏は予科練上がりの特攻兵だったそうだ。監督の井筒和幸監督は撮影の合間に、西村氏から、「先輩をたくさん見送ったんだよ。悲しかったな。でもさ、あのポン打って出ていたのはほんとだよ」と聞いた話を紹介している。蒲原宏海軍軍医は 1945 年 2 月頃から、ヒロポン注射を打つことを命じられたと証言している。注射される特攻兵から「軍医さんはいいね」と言われた。蒲原氏はどんなに胸を痛めたことであろうか。返事の仕様がなかったと語っている。彼は戦後、医学界で大きな貢献をし、俳人として句集も出している。昭和天皇が亡くなった翌年の 1990 年の夏、詠んだ 4 句がある。「天皇に　責任あり　敗戦忌」、「裕仁は　萬世の愚帝　敗戦忌」、「我もまた　責任のあり　敗戦忌」、「南溟（なんめい）に　眠る学友　敗戦忌」。昭和天皇を愚帝と呼び、戦争責任があると言い切る。そして、自分にも責任があると認識している。相可氏は「何らかのかたちで戦争を担った者が、このように主体的に反省する姿勢こそが真の反省であり、これからの戦争を阻止する力につながるのだと思う」と書いている。本書は後半で、特攻兵の生と死を巡る様々な悲劇的な事例報告を記し、「戦争責任論」を明解に展開している。そして、「『戦争はやめろ』『戦争なんかには協力しない』と声をあげれば、戦争は止められる。民衆どうしには、本来、戦争をしなければならない理由などないのだから」と結んでいる。